
Fate Ext^rer ～イレギュラーな乱入者～
みやとし

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e E x t e r くイレギュラーな乱入者く

【作者名】

みやとし

【あらすじ】

神の誤りで死んでしまった主人公、みやばとしあき宮羽寿明彼は神を脅しや強請をかけ様々な能力や武器を得てF a t e／E x t e rの世界に転生したのだった。

※本作はクロスオーバーとして以下の作品からキャラクターが登場します

F a t e／s t a y n i g h t

F a t e／z e r o

F	F	F
a	a	a
t	t	t
e	e	e
/	/	/
E	E	A
X	X	p
T	T	o
R	R	c
A	A	r
		y
C		p
C		h
C		a

キャラクター設定

主人公

- ・名前
： みやばとしあき 宮羽寿明
- ・誕生日
： 8月12日・血液型：B型
- ・性別
： 男／年齢：16歳
- ・身長
： 175cm／体重：63kg
- ・イメージカラー：黒
- ・特技
： 悪知恵、屁理屈
- ・好きな物
： 面白いこと、のんびりできる空間
- ・嫌いなもの
： 自分より頭の切れる人
- ・天敵
： レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ
- ・パラメーター
： 筋力：A／耐久：B／敏捷：B＋／魔力：EX
- ／幸運：C／宝具：A

サーヴァント

- ・クラス
： キャスター
- ・性別
： 女
- ・身長
： 160cm／体重：49kg
- ・スリーサイズ
： B98／W57／H95
- ・イメージカラー：白

第一話 転生

俺は目が覚めると真っ白な空間に寝そべっていた。そこは見たことのない空間が広がっていた。

「ここは、俺は、確か……」

自分の名前『宮羽寿明』みやばとしあき名前は記憶している。最近の記憶、確か俺はいつも通り過ごしていたらいきなり胸が痛みだし、その後すぐ入院その後苦勞しながらだが楽しく入院生活を送っていた。だが、それ以上の記憶がない。

「つまり俺は…死んだのか…」

あり得ない話ではない。だが実はここは夢で、俺は今ただ眠っているだけなのでは…けれども俺が記憶しているのはほんの数日。手術か何かをした覚えもなければ、その後症状も悪化した覚えもない。ならばやはりここは夢なのか？最悪の場合を考えれば仮死状態。そこら辺りが妥当なのではないだろうか……

「いやここは死後の世界じゃよ」

俺が考えに耽っていると、空？上？から長い白髭を生やした老人が降りてきた。

「あんたは？」

「生物の生死を司る神と名乗っておるものじゃ」

見た目通りだった。

「ふくん、本当にここは死後の世界なのか神様（笑）？」

「なぜそこで笑う！？まあ細かいことは良いじゃろう。性格に言えばここは死後の世界の入り口と行ったところじゃ」

「？どういうことだ？」

「ほれ、よく言うじゃろしんだら三途の川を渡り閻魔のところに連れていかれると。ここはその三途の川のある場所の入り口じゃよ」

「ふくん…じゃ」

俺はそう言って神さま（笑）の横を通り過ぎようとしたのだが、

「ま、待つのだじゃ」

「ん？」

「実はお主はわしの手違いで死なせてしまったのだじゃ。じゃが死んでしまったては生き返させることは出来ぬ、なので詫びとしてお主を好きな世界に転生させてやろうと思うのだじゃがどうじゃ？」

「だが断る！」

「なぬ！？」

俺の発言に神さま（笑）は目が出るほど驚いていた。

「な、何故じゃ！？」

「だってよくあるし、何でもかんでも転生させればいい手もんでもないだろ？」

「じゃ、じゃが悪い話でもなかろう？お主だって好きな世界の一つや二つあるじゃろう？それにある程度ならお主の好きな能力も付けやろう。な、な、好条件じゃとは思わぬか？」

俺はこのじーさんの顔をよく見ながら少しゆすってみることにした。

「なあ神さまよう、なんで俺にそこまで閻魔のところに行ってほしくなんだ？」

「そ、そんなことはないぞ…」

「そうか」

神さま（笑）は口笛を吹きながら誤魔化そうとしていた。だから俺はそう言ってまた神さまの横を通り過ぎようとした。

「ま、まて！なぜ行こうとする？！」

「何故って、爺さんが正直に話してくれないじゃないか、そんな奴を信じるほど俺はお人好しじゃあないんでね。じゃ！」

俺がまた歩みを進めようとするがこの爺さんが俺の脚にしがみついてかなり必死だ。かなり鬱陶しいが面白い。

「分かった話す！話すから待ってくれ！」

爺さんの話によると、このまま俺が閻魔大王のところに行かれると親まって俺をしなければしまったことがバレ、閻魔大王自身はそうでもないのだがその後色々神さまの世界で怒られ処罰され自分の地位が危うくなるらしい。

「なるほどそれは大変だねww」

「あ、ああそうなのじゃ…（不安じゃ、なんかいろいろと嫌な予感がするのじゃ）」

「じゃあお望み通り俺を転生させてあげる。世界はそうだねfateで良いよ、あそこ一度体験してみたかったし」

「そ、そうか。（思ったよりまともな回答じゃな）それで具体的にどこじゃ？fateでもいろいろあるぞ？」

「ああ、確かに。うゝん…どこでも良いよそっちの事情に任せる。サーヴァントのクラスもそっちに任せるよ。それで俺の能力は…あ、紙とペン貸してくれる？口頭で説明するの面倒うだし」

俺がそう言うのと爺さんは「分かった」と言って紙とペンを貸してくれた。そして俺は能力等をその紙に書き爺さんに渡した。

「えーっと何々、魔術回路を三桁ほどと宝具並みの剣（最低C最高Aクラス以上）を二本。両方背中にセットできるように、それから礼装はあるだけ全部そして自分のパラメーターは筋力、耐久、敏捷をB〜Aくらいその他はのパラメーターは自分の魔術回路と武器に合ったパラメーターで頼むじゃと…」

「それじゃあ頼んだぞ！」

すると爺さんは体を震わせながら怒鳴った。

「出来る訳なからう！こんな規格外お主は一体どこを目指しておるのじゃ！化け物か、化け物でも目指しておるのか！？」

俺は爺さんの胸ぐらをつかみどちらの立場が上かはっきりさせた。

「おいじい、お前一体どの立場で物言ってるのか分かってるのか？お前に課された選択肢は出来る出来ないじゃなく、やるかやらないかだ。俺は良いんだぜどっちでもよ…」

「分かった…お主の言うとうりにしよう………」

俺は爺さんから胸ぐらを離し、気さくに笑った。

「そうかそうか、最初っからそう言ってくればよかったんだよ爺さん、アハハハハ！」

「う、ううう………」

なんか爺さんが泣いてるけど俺は気にしない！

「それで爺さん、一つ確認だけど転生先でも俺の記憶はあるんだろうな？」

「ああ、その点は心配要らん大丈夫じゃ」

俺は「そうか」と言ってとりあえずその場に座った。

「それではしばらくそこで待っておれ。今お主の転生先やお主の希望に沿えるよう、いろいろ準備してくるでな」

そう言って爺さんは何処かへ消えて行った。

数十分すると爺さんが戻って来た。ちなみに俺はその間寝ていた。

「ふあゝあゝ爺さんお帰り、どうにかなったか？」

「（お主がどうかしろと言ったくせに……）ああ、どうにか出来たぞ。どうするいろいろと概要を聞くか？」

「いや、いい。向こうに着いたら自分で確認するから」

「そうか。ならばあの扉から入り真っ直ぐ進むが良い。気が付いたら転生先に着いておる」

爺さんの指が指す方向を見てみると分厚そうな扉というか、門が合った。

「そうか分かった。それじゃあな、世話になった」

俺はそう言って門をくぐり、転生先へと向かったのだった。

第2話

聖杯戦争開幕

俺は目を開けると何処かの学校の校門の前に居た。

「ここは……ほむらはらがくえん穂村原学園か？いいや少し違う、だとしたらまさか月つくみはらがくえん海原学園か？！」

俺はしばらく頭を抱え考えたが、分からなかった。

とりあえず考えても埒があかない！もしここが月海原なら、この校門の前にあいつが…

「やあ、宮羽おはよう。今日もいい天気だな。悪いが手荷物検査をさせて貰うぞ。鞆を開けてくれるか」

そこに居たのは丁度俺が探していた人物、柳洞りゅうどう一成いっせいだった。とりあえず様子見として俺は適当に話し掛けてみた。

「よう一成、どうしたんだよその喋り方は。ハハハ！」

かなり適当に話し掛けてみた。流石にこれは無いと思ったが、

「やあ、宮羽おはよう。今日もいい天気だな。悪いが手荷物検査をさせて貰うぞ。鞆を開けてくれるか」

さっきと同じ言葉つまりこの学園は月海原ということか。つまりこの世界は fate extra か。

俺は校内に入ってみると、金髪で赤い制服を着た少年レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイを追って、階段から降りて来た少年が用務室に向かった。その様子を見て二人を追いかけていったもう一人の少年、本編ではこの世界で起こる聖杯戦争の勝者、きしなみはくの岸波白野。

（確かにお前は本編では勝者かもしれないが、今回の勝者は俺だよ親友……）

ちなみに俺には何故かこの世界で過ごした時の記憶がある。多分この世界で過ごしていた俺の分身がいたのだと思う。

まあぶっちゃけそんなことはどうでも良いから置いて、俺は3人を追った。といっても岸波の2〜3m後ろに居るから追うも何もないのだが、確かこの時レオが何か言っている筈だが悲しきかな何も聞こえない。

しばらくすると、岸波は奥に進みその後を歩いて行くと用務室前には誰も居なかった。

いいや実際にはそこはただの行き止まりの壁でしかない。だが、ここが本戦の聖杯戦争へと続く道なのだ。俺は精神を集中し壁に一步また一步と歩いて行くと、俺はスーッと壁の中に入って行った。

部屋の中はきちんと部屋があった。そこには本編で見覚えのある人形があった。そしてその先の扉は異界の入り口、その表現がぴったりだった。だが、俺にはそんな関係ない。俺はただ先を目指すだけだから。

「これは、この先で、自分の剣となり、盾となるもの……」

そんな声がどことなく聞こえてきた。だが俺はそんな声には耳を傾けずこの従者と共に、俺は奥へと進んでいった。そしてその先の扉は異界の入り口、その表現がぴったりだった。だが、俺にはそんな関係ない。俺はただ先を目指すだけだから。

「これは、この先で、自分の剣となり、盾となるもの……」

そんな声がどことなく聞こえてきた。だが俺はそんな声には耳を傾けずこの従者と共に、俺は奥へと進んでいった。

奥に進んでいくとその場所は学校の面影は微塵も残ってなく、いっ物陰から怪物が現れ襲われてもおかしくない空間。地下迷宮と化していた。

俺は正直今この状況を確実に楽しんでいた。

「ようこそ、新たなマスター候補よ」

どこからともなく声が聞こえてきた。

「君が何かを得たいのなら、まずはゴールを目指すがいい。さあ、足を進めたまえ」

「ふ、言われるまでもない」

俺はそう呟きさらに奥へと足を進めた。そして奥に進んでいくと、敵性プログラムとの戦い方やアイテムフォルダなどの説明を丁寧エネミーに受けながらさらに奥へと進んだ。

そしてこのダンジョンの最奥、ステンドグラスに囲われた息苦しさを感じる荘厳な空間。大抵の奴ならここがゴールと思うだろう。だ

が違う、ここはゴールではない。それどころかここはまだスタートラインでしかないのだから。

すると俺の近くに一体の死体があった。それどころか周りには何十何百という死体が転がっていた。ある者は体を貫かれ、またある者は体を両断され、他にも様々な死に方をしていた者が居た。

すると近くに居た死体のすぐそばに居た人形がカタカタと音をたて立ち上がり、大きく体を振りそのままこちらに突進してきた。

「敵だ、奴を撃退しろ！ A！ A！ G！ B！ B！ B！ B！」
A t t a A k t a G u a r r e a B r e a B r e a k

何度かこちらの攻撃は当たった。だが俺の^{ドール}人形の攻撃はまるで予想していたかのようにカウンターが決まりあっさりやられてしまった。そして俺は敵人形の攻撃を受け後方に飛ばされた。普通の人間ならやられてもおかしくない攻撃だった。だが俺はゆっくりと起き上がった、どうやら転生時の俺自身のステータスはすでに更新されているようだった。だが、先ほどの攻撃で無傷ではないようで腕から血が流れていた。

「チッ！仕方ねえ一か八かやってみるか、俺はまだ死ぬ気は無いんでな！」

俺は血を垂らし円を描きながら全力で走った。そして円の中には星のマークを描いた。そして走りながら俺は一つの呪文を呟いた。

「素に銀と鉄。

礎に石と契約の大公。

祖に我が大師シュバイオーグ。

降り立つ風には壁を。四方は門に閉じ、

王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ。
みたせ みたせ みたせ みたせ みたせ

繰り返すつど幾度。ただ、満たされる刻を破却する。

セット
A n f a n g

告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者。

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊に纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

そうこれは原作 f a t e で用いられたサーヴァントの召喚呪文だ。俺はとにかくこれに掛けてみた。だが、詠唱が終わるころには俺は立ち止まっており、敵人形が襲ってきた。もうだめかと思ったその時、

「ほう、これまた古い召喚を用いる。よかろう。その少し待たれよ、その者お主の様な木偶には惜しい存在。寄ってこの私がもらい受けよう」

周りにあったステンドグラスが砕け、共に部屋に光がもった。そして部屋の中央目の前に一人の人間の様な胸の豊かな白い着物を着た女性が居た。

「良き魂は我が下に、悪しき魂は悪・即・除！サーヴァントキャスター召喚に従い参上した。貴方が私の主で構わぬな」

「ああ、構わないキャスター」

「良からう契約成立じゃ」

すると左手の甲に鈍い痛みが生じ、見てみると手の甲には3つの模様が浮かび上がっており、俺はすぐにこれが令呪れいじゅと分かった。

「取り敢えず私の背後に居る木偶はお任せよ」

「分かった。キャスターお前の実力見せてくれ！」

「承知した」

そう言ってキャスターは人形と戦闘を始めた。そして戦闘が終了するのになんか時間はかからなかった。俺が指示を出さなくても、キャスターは自分が持っていた小刀で人形に攻撃を繰り返して、そして人形は粉々に砕け散った。

「手に刻まれたそれは令呪。サーヴァントの主人となった証だ。使い方によってはサーヴァントの力を強め、あるいは束縛する。3つの絶対命令権。使い捨ての強化装置と思えばいい。ただしそれは聖杯戦争本線の参加証でもある。令呪をすべて失えば、マスターは死ぬ。注意することだ。取り敢えず、ここがこここのゴールだ。ずいぶん未熟な行軍だったが、君の様なイレギュラーすぎる存在がマスター候補は初めてだ。だからなお見ごたえ溢れる者だ、誇りたまえ」

何故かこの声を聞いているとあの似非神父を思い出すのは俺だけではない気がする…

「おや、私の素性が気になるかね？ 光栄だが、そう大したものではない。」

それはそうだ。これは定型文、こいつの癪に障る喋り方に文句を言っても始まらないのだから。

「その通りだ。君は特に異例中の異例。君に、何者かから祝辞が届いている。ゝ光あれ」と

出来ることならそいつにはどうもでも言っといてくれ、取り敢えず俺は眠い。なぜかって？ そんなことは決まっている今の俺には血

が足りないのだから………

「キャ、キャスター取り敢えず、後は任せた…」

「マ、マスター!？」

俺は床に倒れ嗜好がホワイトする瞬間キャスターの声とも一つあの声の最後の声が聞こえた。

「さあ、聖杯戦争を始めよう」

と、こうして俺はこの月で行われる電脳世界での新たな戦い聖杯戦争の最初のスタートラインに立ったのだった。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~13838

Fate Exter 〜イレギュラーな乱入者〜
2015年09月20日 22時10分発行